

戦後80年企画 熊本空襲 記録の継承プログラム

「上村文男先生と歩いた県内戦争遺跡・証言調査から、

次代へつなぐ “くまもとの戦争遺産” へ」

代表幹事・くまもと戦跡ネット 高谷和生

1 はじめに

昨年2月逝去された「上村文男先生を追悼ぶ会」のあと、5月に開催されました2024年度活かす会総会で、高谷が新たな代表幹事として就任いたしました。

本日の学習会では、上村文男先生や熊本の戦争遺跡研究会の皆さま方と調査活動した思い出、昨年度から三年計画で始まった「戦後80年企画 熊本空襲 記憶の継承プロジェクト」の現在の到達点について、活かす会ニュース内容等を一部再録して、皆さん方と一緒に学習します。



「上村文男先生を偲ぶ会」令和6年5月

2 上村文男先生との出会い

私は、歴史学・日本考古学の調査研究を専門としています。熊本県教職員として奉職し、特別支援教育諸学校（重度重複障がい児のコミュニケーション学習 他）と県文化課（弥生から古墳時代初頭期の地域社会の成立、木製品や木製武具、天草の近世陶磁器 他）で、定年まで働きました。その様ななか、40歳代後半で荒尾養護学校（当時）に赴任しました。周りには「コンクリートの不気味な建物があちこちに！」「万田坑の遺産かな？」とわからないことばかりで、ここが高谷の戦争遺跡との出会いでした。

その後は、戦後60年の2005年に市民グループ「玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワーク」を発足させました。その後は、玉名市大浜に残された「玉名（大浜）飛行場」と荒尾市中央区等に広域所在した「東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所（荒尾二造）」の戦争遺跡の残された遺構や遺物の調査、当時証言等の収集を中心に、年二回の例会活動を行いました。



上村文男先生と第32回熊日出版文化賞授賞式

その活動で出会ったのが、上村文男先生と熊本の戦争遺跡研究会（堀浩太郎・大野進・岡崎和三・二見正輝・山野幸司さん）の皆さま方です。その後は、ご一緒に、県下一園での調査となりました。上村先生は県全域に渡る教職員組合時代や平和活動での幅広い人脈を基に、戦争の加害と被害への鋭い視点、悲惨な体験をされた人々に寄り添った証言の聞き取り、歴史事実の積み上げ等の手法は素晴らしいもので、高谷は今も継承しています。

それまで知られることのなかった「太平洋戦争期の熊本の戦争遺跡」を、あたかも「薄皮を一枚ずつ剥いでいく活動」となりました。その成果は『子どもと歩く戦争遺跡Ⅱ 県北編』、『同Ⅲ 県南編』の刊行となり、さらに第32回熊日出版文化賞受賞となる『戦後65年 熊本の戦争遺跡』へと結実しました。以下、県南二箇所での活動成果と上村先生との思い出を紹介します。

3 上村文男先生・熊本の戦争遺跡研究会と歩いた県内戦争遺跡の調査

(1) 水俣「日本窒素水俣工場裏山の防空砲台等」調査を通して

水俣での調査の第一歩は、元チッソ株式会社水俣工場労働組合執行委員長の山下善寛さんとの出会いでした。山下さんとの現地調査では、日窒工場裏山の調査はもちろんのこと、茂道集落での証言聞き取り、大村の第二海軍航空廠袋補給所の調査等、実りの多い調査となりました。そして、大牟田市域調査での疑問「なぜ日本陸海軍は、市民を空襲から守らないのか」の答えを知る機会となりました。



上村先生との「水俣調査」山下善寛さんと

これまで無防備だった日本窒素肥料株式会社水俣工場が、艦載機による爆撃等を5月14日に初めて受け、人々や工場・多くの民家が被害を被りました。この激

しい空襲により日窒工場防空の必要性が問われ、昭和20年5月23日水俣市内に北九州で編成された機関砲第二十一大隊（六個中隊）の第六中隊が移駐してきました。これは、葛原忠彦中佐の330名部隊で、日窒工場裏山の梅道と、海側に面した台地である丸山に陣地を構えました。

梅戸陣地は、眼下に日窒水俣工場を望む東側の小高い丘の頂上に構築されました。主要な兵器は「ケキ砲（二式多連装高射機関砲・口径20mm・毎分300発）」で、設置された6門の砲が電動装置で同調して、単一目標に集中射撃できる特徴を有していました。現在までに確認された範囲だけでも現地には、砲庄・指揮所と想定されるコンクリート製一辺1.5mの六角形土台一基、コンクリート製の筒状で径3mの構築物一基がいまも現存しています。

丸山陣地は、丸島漁港の東側台地の頂部に陣地が構築され、葛原隊の半数が配置されていたようです。丸山は単独の台地で周辺は急傾斜地で現在は開墾も進み、段々の畑地がつくられています。当時の証言では、梅道陣地と同様にケキ砲が、台地の頂部平坦部を中心に配置され、中央部には今も径15mの砲台設置後の陥没孔と想定される一基が残されています。また、周辺部にはコンクリート敷設の施設が数箇所散見されますが、全体状況は不明です。

7月31日の空襲で、両陣地の高射砲隊はアメリカ空軍機に対して激しく応戦しています。葛原隊の梅戸陣地では応戦中に兵士1名が戦死、2名の負傷者がでています。詳しくは『記録・熊本空襲No9・10』「水俣丸島高射砲部隊陣中日記」、『新水俣市史』「私の空襲記録」として所収されています。

さらに、市内各所には丸山（丸島）、梅戸のほか次の防空施設があり、化学肥料や火薬等の製造・原料の供給を行う日窒工場を防御していました。丸島陣地東方の古賀町（現古賀町チッソテニスコート付近）の平地③に高射砲陣地が形成され、高射砲四～五門が配置され、中・高空より進入する敵機への水俣防空の任に当たっていました。この陣地の部隊名は判明しませんが、西部高射砲集団から分遣された130名の部隊でした。菜切り地区④（陸軍丸島・梅道陣地の中間台地）には、出水海軍航空隊から派遣された高射機関砲隊が陣地を構えていました。その他水俣第一小学校裏の高台の秋葉山⑤、水俣駅南側台地の江南町の陣の坂⑥にも、別部隊の高射機関砲部隊が布陣していたことが聞き取りで判明しました。軍は市民でなく、工場のみを守っていたのです。

上村先生達と山下善寛さんとの調査は、以上の様な成果となりましたが、その後調査は進んでいません。熊本県南部の空襲に関して、当地での空襲が肝ですのでチッソ株式会社の協力を得て、地元教育委員会等による周辺の踏査や地形の略測等の本格的な調査が必要ではないでしょうか。

(2) 人吉「人吉海軍航空隊基地跡」調査を通して

人吉・球磨地方の調査では、元小学校教員の山下完二さんとの出会いがありました。初めて当地を訪れた中で、山下さんは、教組の宮丸賢一さん達と早くから現地証言を収集して、地下壕略図を作製して、高原（たかんばる）の「人吉海軍飛行場」と神殿原（こうどんばる）の「陸軍秘匿飛行場」の両所を対比させながらの取り組みを進めておられました。この地域全域での視点が大切です。

海軍人吉航空基地は、球磨郡相良村・錦町一武に所在し、地元では高原飛行場の別称を持ちます。昭和19年2月1日人吉海軍航空隊として第十八連合航空隊に所属発足し、第一〇四期普通科整備術練習生が入隊します。

基地設営は、海軍佐世保鎮守府施設部鹿屋支部出水地方施設事務所人吉出張所の施設部隊が直接担当し、第二代人吉海軍航空隊長田中千春大佐の当時証言では「練習航空隊の施設というよりも、完全な計画のもとにできた航空基地に、さしあたり練習航空隊が、陣取ったとみるのが本当だったろう」と語っています。滑走路は全長1350m、幅50m、県内では唯一の全面コンクリート舗装でしたが、現在は全て撤去されています。

当初は練習・整備教育隊に指定されますが、乙飛整備術練習生の予科練生第1～8期（本飛行場換算）までが整備技術訓練を行い、全期間を通して約6000人が教育を受けました。昭和20年3月には所属していた第十八連合航空隊が解隊されたことから、佐世保鎮守府隷下第二十二連合航空隊へ編入されます。ここで整備練習生教育は中止され、その後は三次に亘り教官・練習生を選抜し本土防衛の為に兵力を展開し、基地そのものは本土決戦の協力施設となります。その後は松根油製造、簡易兵器・爆弾運搬用木箱・震洋艇製作及び諸自活作業を行います。戦局悪化に伴い昭和20年7月10日人吉海軍航空隊は解隊し「中型練習機、軽爆撃機ヲ以テ作戦スル必要ナ施設」になり、基地要員は発足した九州航空隊人吉派遣隊員に移行する。本航空基地跡には海岸部に近接した出水・鹿屋基地から多量の物資が運びこまれ、基地周辺の学校や民間倉庫等にも分散収納し、「本土決戦の為に兵站基地」となりました。

一方昭和20年3月には、空爆被害軽減及び本土決戦に向けて基地施設の地下移転が、第五二一設営隊により進められます。主な施設として耐弾式地下発電所、地下魚雷調整所、地下作戦指令室・地下無線室、設営隊壕、兵舎壕、弾薬庫壕、地下格納壕等です。通称の人吉飛行場周辺地域には、人吉海軍航空隊飛行場跡、第二十二海軍航空廠人吉分工場、佐世保鎮守府軍需部施設、岡本工業株式会社人吉工場が立地していたこととなります。

また、神殿原の「陸軍秘匿飛行場」は、県内初の「埋蔵文化財発掘調査」へと繋がりました。

上村先生達と山下完二さんとの調査は、以上の様な成果となりました。その後、山下さん達は「人吉球磨の戦争遺跡を伝えるネットワーク」を設立し、地域の平和活動にあたっておられます。また、観光施設となった「錦町立人吉海軍基地史料館（山の中の海軍の町 にしき ひみつ基地ミュージアム）」動向をチェックし、戦跡賛美とならない様に注視しておられます。



上村先生との「人吉調査」山下完二さんと

4 戦後80年企画「熊本空襲 記憶の継承プロジェクト」

(1)「熊本空襲 記憶の継承プロジェクト」の趣旨等

戦後80年をむかえ、太平洋戦争期の記憶は、次第に消え去りつつあります。熊本空襲に関しても、関わる戦時体験者は減少し、一方ではその膨大な証言等は未整理のまま蓄積されましたが、

これも記憶とともに忘れられようとしています。

本プロジェクトでは、これらの未整理の資料等を、再度構築しなおすとともに、**体験者の新たな記憶を呼びさまし、次代に継承する事業として「空襲写真のカラー化事業 記憶の解凍！」**他三事業に取り組むものです。

写真カラー化の先行事例として、新潟県長岡市（長岡市空襲資料館）では、東京大学渡邊教授及び新潟日報社と共同で、戦前から戦後復興期までの白黒写真をA I 画像認識と空襲体験者等からの聞き取りによりカラー化する「空襲から復興」事業を展開しています。

本事業では関係諸団体・機関等と連携して、戦後80年を核として「熊本空襲の記憶」を次代に継承していきたいと考えています。なお、ここで使用する「記憶の解凍」という言葉は、東京大学渡邊英徳教授による提言です。詳しい内容は、庭田杏珠・渡邊英徳著『A I とカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』光文社新書、2020年刊行本に記載されていますので、図書館等で是非ご覧ください。これら四項目は、以下の通りです。

- ①項 熊本空襲写真のカラー化事業「**記憶の解凍！**」
- ②項 熊本空襲資料の新収集事業「**現物が語る記憶！**」
- ③項 熊本県内での日本側全空襲のデータベース化事業「**記憶の記録・集約！**」
- ④項 熊本県内各地への米軍側空襲記録のデータベース化「**新資料の調査・集約！**」

昨年度から「戦後80年企画」として提案しました「熊本空襲 記憶の継承プロジェクト」については、2024年7月1日に実施した「第16回熊本空襲を語り継ぐ集い」当日の様子を第323号に、概要として第327号に「その1」を、第332号「その2」に続き、「熊本空襲 記憶の継承プロジェクト その3」概要を報告しました、本編ではそのまとめてみます。

（2）①項 熊本空襲写真のカラー化事業「**記憶の解凍！**」

ア 取り組みの実際と成果

作業対象は、くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク様の承諾のうえ、所蔵される米軍撮影「熊本空襲白黒写真20枚」を予定しています。同会刊行の平和継承リーフレット『空襲下の熊本』及び『M76焼夷弾と熊本空襲』『松橋空襲』を参照ください。

以下、本作業の流れと到達点、啓発の姿を再度確認します。

- ①ウェブデザイナーさん等による「フォトショップA I 画像認識」による自動色付け
- ②作成した資料を、「活かす会」に等の「戦争・空襲体験者」による細部の色補正・再現、写真に関わる証言の収集、非体験世代とともにワークショップ「記憶の解凍」による共同作業
- ③併行し、「くまもと戦跡ネットとの連携調査」による、16ミリカラー映像・スライド写真・ガンカメラ映像、各種刊行物等による客観資料を基とする**歴史検証作業**
- ④カラー化された写真の「記憶の再現」関わる新たな「**空襲ストーリー**」作成

全国で米軍空襲写真に特化したカラー化事業は僅少ですので、熊日新聞社6月30日第一面報道にあるように、熊本県内で注目される取り組みとなりました。ただ、作業にあたっては「旧来の低解像度写真ではカラー化は不鮮明だ」、「無限大とする軍カメラでの機能特性から周辺部は色づけできない」「対象物となる複雑な被写体・構造物・町並み等は、A I 処理では不鮮明となりやすい」等の課題がありました。です。先行事例がなく、織田祐輔さんの『米軍カラーフィルムが捉えた日本軍の艦船・航空機・軍事施設』米軍撮影のガンカメラ等の映像も参考にして初年度となる第一弾は「4枚」で、2024（令和6）年度でほぼ完成しました。当時の体験世代の方々4人個別で彩色状況について拝聴するなどを行い、これらの諸課題はある程度はクリアしたのではないのでしょうか。完成したA I カラー化写真は、有償とはなりますが、県内諸学校や職域団体等へ、貸出や展示等を予定しています。



□熊本空襲のカラー化事業

左：オリジナル白黒

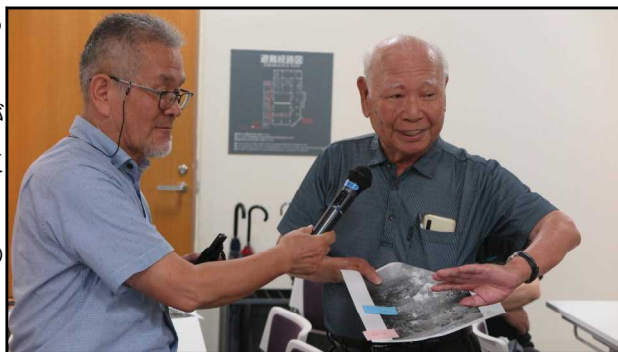
右：当初A1処理のカラー化写真

イ 証言会・ワークショップでの実際

今回の作業対象は、「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」の承諾のうえ、所蔵される1945年8月10日第二回熊本大空襲での米軍撮影「白黒写真18枚」内の3枚と8月7日撮影の1枚の「計4枚」です。ここではカラー化作業の中心となる**第二回熊本大空襲の概要**を述べます。

米軍が沖縄に上陸して以降、日本軍の組織的抵抗が終わる前から旧日本軍飛行場を急速に整備し、6月には本格的に米陸軍極東航空軍が移駐を開始しました。本軍は、第5・7航空軍から成り、所有する爆撃機のタイプ別に8個軍団を構成していました。

熊本市街地への第二回目となる空襲は、8月10日9時56分に始まり、11時40分までの2時間余りの空襲です。第二回熊本空襲では、別表1の通り第7航空団が先行し、第5航空団が続きました。攻撃当初の比較的



第16 熊本空襲を語り継ぐ集いでのワークショップ色づけ発表の様子

高い位置からの投弾では「M47A2焼夷弾」や「M69からなるE46集束焼夷弾」を投下しました。さらに焼夷弾の着地空白域を目標に、後半には後詰めとなる軽爆撃機（A-20・A-26）や戦闘爆撃機（P-38・P-47）が「ナパーム弾攻撃」を行ったものです。後半に投下された爆弾は「増設燃料タンク使用のナパーム弾」及び「落下傘付きM76焼夷弾」であり、投下場所として「桜町・新市街、熊本駅・機関庫・春日校、岡村鉄工所、市立商工学校・一新校」を、新町・島崎方面を特定しました。

7月1日「ワークショップ」では参加された参加された25名が、4班に分かれ4枚の白黒写真に色鉛筆等で色づけします。また、ポストイットには色付けに関わる思いや感じた事を記入し、該当写真に貼付けました。この折は、証言者の中野喜重子さんをはじめ、敗戦時国民学校三年生だったという方も当時の呉服町や妙乗寺墓地の様子を紹介されました。最後には、各班から、彩色での「解凍された記憶」や思い等を発言・紹介いただきました。

ウ A写真：白川左岸世安町の日華護謄（ごむ）分工場へのナパーム弾投下

撮影概要：軽爆撃機による機上からの撮影写真です。後部席から手持ちカメラで撮影し、爆撃箇所から遠ざかる写真となります。写真内には、画面下側には白川が、上側には国道三号線と道沿いの住宅が見えます。工場は、当時防毒マスクや地下足袋等の生産を行っていた熊本駅南の田

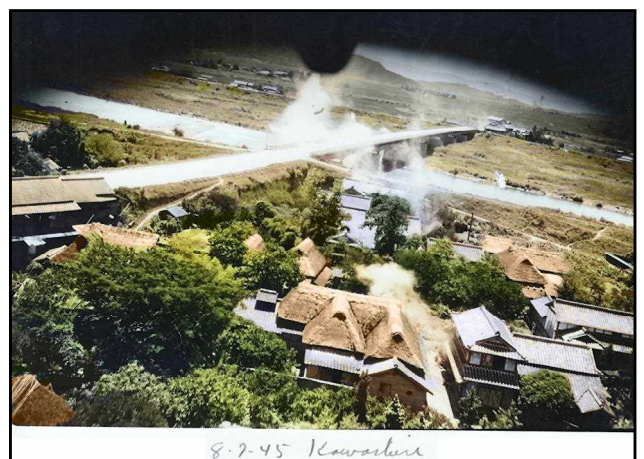
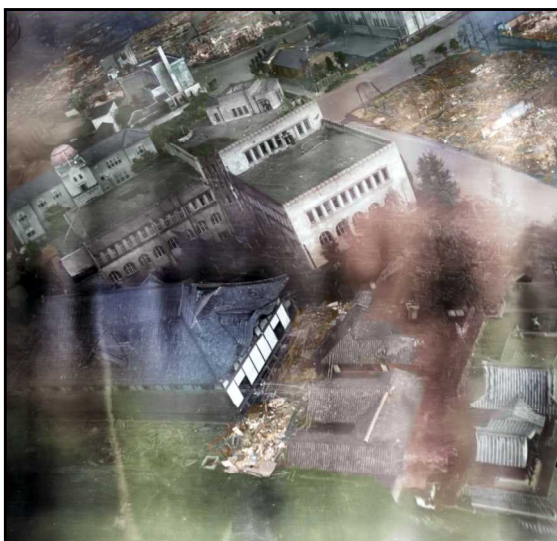
崎町にあった旧月星化成株式会社である「日華護謄工業株式会社」が白川左岸側に増築した分工場です。3棟中央の長尺建屋の屋根頂上部に対空監視所を持つ計7棟の平屋建て工場、周囲を囲む塀には、対空迷彩が施され、中央には巨大な火炎があがります。

彩色・証言等：各建物屋根部中央に太い帯線を縦断させ、屋根角部から壁面には同色で塗彩し、一部には斑点迷彩も見えます。1945年3月18日の三菱重工業熊本航空機製作所空襲のカラー版ガンカメラを参照して、三色（灰色・濃茶色・木目地茶色）を補色しました。また、中央火炎はその状況から「増設燃料タンク使用のナパーム弾」と想定でき、ベトナム戦争時火炎を参照して、黒煙・オレンジ色を強めに表現しました。

エ B写真：市街地の白川流域である本荘町等への空襲

撮影概要：画図町・南熊本方面から市中央部へ向う軽爆撃機（A-20 他）による機上からの撮影写真です。画面中央を白川が横断し、川岸の石垣と本荘町中央の「宝珠院醤油（玉城醤油）」の煉瓦造煙突頂部がふくらんだ特徴的な白壁の大型倉庫が際立ちます。写真手前には河原町電停から延びる市電路線に停車・退避する熊本市電二両が写っています。本荘方面の家屋には、投下された165ガロンNP焼夷弾が連続して破裂している様子が確認できます。

彩色・証言等：中央部の白川は川面を明るくし、石垣や手前側の河原町妙乗寺墓地・墓石と対比させました。当地及び本荘町の一部には7月1日の第1回熊本大空襲で被災した建物を片付けて更地にした跡は、7月1日のワークショップ内で意見をいただいた通り白色を補色しました。また、手前2両の市電は木質を際立てた茶褐色と紺色にあえて別色とし当時状況を復原しました。



完成した写真四葉 左上がA写真、右上がB写真、左下がC写真、右下がD写真

オ C写真：花畑町・桜町への空襲

撮影概要：この写真も熊本市中央部上空で爆撃を終え通過する軽爆撃機（A-20 他）による機上からの撮影写真です。写真中央は現市民会館である熊本市公会堂と7月1日深夜の第一回熊本大空襲被災後の市街地が写っています。左側のコンクリート建物は熊本市公会堂「本館」、入母屋造り「日本館」、通り向かいには海軍人事部が使用した「洋館（現国際交流会館）」、奥には平成28年熊本地震で解体された通信省熊本貯金支局の建物が見えます。さらに右側手前には、現存する山崎菅原神社の瓦屋根が写っています。

彩色・証言等：熊本市公会堂の本館建物の屋根は防水アスファルト処理で黒色に壁面は灰色に、日本館は黒色瓦屋根と白壁を対比させました。また、戦前絵葉書に描かれたドーム形状の市民会館洋館塔屋は、銅張りであることから赤く塗り込まれていましたので、忠実に再現してみました。

カ D写真：川尻町から富合を抜け宇土方面への国道3号自動車橋への攻撃写真

撮影概要：この写真は、米国人所有者記載にあるように1945年8月7日撮影の戦果確認用「ガンカメラ」白黒写真です。攻撃部隊・機体は特定できていませんが、沖縄からの攻撃にきた戦闘爆撃機（P-38・P-47）と想定でき、ガンカメラ主軸がズレて覆い凸部が写真に写り込んでいます。撮影地点は、緑川右岸の富合町杉島で、遠景の山裾は木原山風景林「雁回山」、斜行する道路は国道三号線、緑川橋への銃撃です。集落には瓦屋根民家とともに藁葺きの肥後型並行二棟造系民家が点在します。遠方の宇土市方面に立ち上る煙は黒色に、手前側は機銃弾着弾時の白煙と想定でき、黒煙ではなくここでは白煙として表現しました。

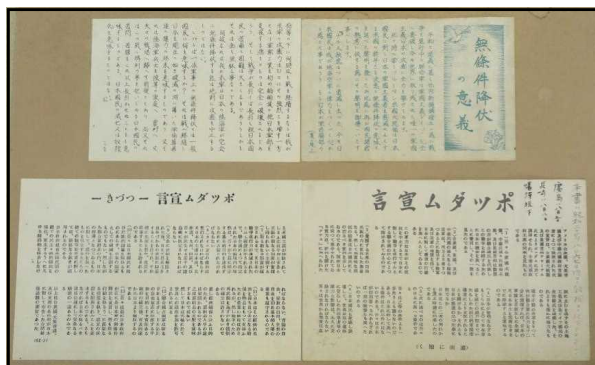
キ 令和7年度の取り組み予定

また、熊本市では例年「熊本大空襲 平和啓発パネル展」を夏期に開催していますが、昨年度は「5項 当時のモノクロ写真をA1でカラー化」で、当時の「焼け跡での昼食」「熊本大空襲の罹災証明書発行風景」等8枚をパネルで示されています。ただ、カラー化した熊日サービス担当者からの説明では、A1自動色づけのみで、時代考証は行なわれていません。「8項 富合町杉島空襲」写真も、本会作業「D写真」とは色目も随分と異なります。今後は情報交換しながら、カラー化精度を高めたいと思います。

さらに、**第二弾となる2025年取り組みとして、次の5枚を予定しています。****E写真：**島崎町の旧熊本市立商工学校、**F写真：**本山町の岡村鉄工所とM76焼夷弾、**G写真：**北岡神社と旧国鉄鹿児島本線、**H写真：**旧国鉄熊本駅と春日国民学校、**I写真：**萩原町の西部瓦斯製造所です。

（3）②項 熊本空襲資料の新収集事業「現物が語る記憶！」

ここでは、1945年7月1日「第一回熊本大空襲」での「焼夷弾（現在確認出来ていないE46集束焼夷弾の部品、照明弾、更なるM69小型焼夷弾）」に関する証言と現物等の収集作業を進めました。二度の空襲を体験された「田中實夫（昭和9年熊本市生まれ）さん証言」では、E46集束焼夷弾の外板「トタン板の部材が降ってきた」との証言を得ることができました。



□熊本空襲で投下された「伝単二種」熊日新聞博物館蔵

□E46集束焼夷弾と各種焼夷弾 岡山空襲資料館蔵

また、1945年7月～8月に熊本、宇土・松橋、菊池、玉名地方等へ投下された紙の爆弾「伝単」に関する証言、新たな伝単現物の発見、投下時に伝単を容器していた通称「伝単爆弾」等の証言収集も行ないます。さらに、熊本県内ではあまり知られていない1938年5月20日人吉・球磨・芦北地域への中華民国軍機による「伝単」投下に関する新たな渋谷敦さんと北御門二郎さん証言も収集できましたが、新たな現物等の収集には至っていません。今後も会での各種活動、展示会等を通し、皆さま方から県民への働きかけをお願いします。

(4) ③項 熊本県内での日本側全空襲のデータベース化事業「記憶の記録・集約！」

ここでは基礎文献として、本会で発刊した『熊本空襲を語り継ぐ』等の書籍を基盤として、熊本日日新聞社刊行『伝えたい私の戦争 第1～5集』、県内各市町村から刊行された市史等・体験談集等から熊本県下での空襲に関する記述を抜き出し、記述内容のデータベース化を図ります。

以下参考までに、玉名（大浜）飛行場・旧大浜村への空襲と証言箇所を抜粋します。

概要：玉名（大浜）飛行場・旧大浜村の空襲

沖縄戦で被害が増大する九州・四国方面の特別攻撃を阻止するため昭和20年5月10日午前7時50分、マリアナの米軍基地から第二十一戦略爆撃機集団42機のB29が発進し、内二機が初めて当地を空襲しました。このB29部隊の沖縄支援作戦は、3月27日から始まり、最終の5月11日まで約百回に及ぶ攻撃が九州地区の各飛行場に向けられました。



戦略爆撃機「B29」二機による大浜飛行場の空襲

この日の空襲で250kg爆弾20発が落とされ本部、車庫、無電室、物置五棟が全潰し、内八発は時限爆弾でした。民家への被害はなかったものの、司令部前庭にも爆弾が落下し、滑走路や建物も正確に爆撃され、軍人や軍属の方5名が亡くなりました。

さらに5月13日午前7時35分、米軍航空母艦ランドルフとパターンの二艦からの艦載機59機による二度目の攻撃が行われました。グラマンF6F戦闘爆撃機やカーチスSB2C爆撃機・ヘルダイバーSB-1戦術爆撃機によるもので、142発の小型爆弾と機銃掃射により、大小の格納庫と飛行場の建物は完全に破壊されその機能を失ったのです。この二回目の空襲では不幸な事に、飛行場と隣り合わせの瀬戸町・天神町・下町の民家や大浜村役場に爆弾等が落とされ、民間人12名が亡くなられ十数戸が焼失しました。この日は、玉名だけでなく菊池飛行場や黒石原飛行場ほか同時に空襲され、県内の飛行場は重大な損害を被りました。

米陸軍戦略航空軍・B29による熊本県内の空襲								
20250401 高谷作成版								
年月日	時刻	目標(現・市町名)	組織	機数	高度(㍎)	爆弾の種類と量(米トン)	備考(米軍資料)	備考(日本側資料)
5月10日	06:52	熊本市街地	第313航空団	2	18500	M66GP14 ¹ 、	第21爆撃機集団の作戦任務No.159	
	午前中	大浜飛行場		2		GP		
7月1日	1日23:50- 2日01:30	熊本市街地	第73航空団	154	10050-11500	M47A3B370 ¹ 、E46IC689 ¹ 、 E36IC7 ¹ 、E48IC48 ¹ 、	第21爆撃機集団の作戦任務No.241 第4回中小都市空襲	熊本市史
	2日02:52		第314航空団	1	14900	M47A2B1 ¹ 、E46IC6 ¹ 、		

表1 B29による熊本県内の概要 20250401版 工藤洋三氏提供

証言：昭和20（1945）年5月13日の空襲

玉名市中尾の中嶋征子(旧姓戸寄)さんは、昭和20年大浜町生まれ。大浜村民12人の犠牲を出した「5月13日空襲」では自宅が爆撃を受け、生後25日目の征子さんは、倒壊した家屋のがれきの

下敷きになったのです。被害状況を確認に出た警察官が、かすかな泣き声に気づき保護されたという。この惨事の中での征子さんの救出劇は「戦時中、奇跡の出来事」として記憶されています。

中嶋さんは「赤ちゃんだった私は、その時の記憶はありません。父親は三池炭坑で労務管理をしており不在で、自宅には祖父母と母親・姉がおり、空襲警報がなると防空壕へと避難したのですが、私一人が避難に間に合わなかったそうです。空襲では、役場横の本宅が爆弾で全壊し、駆けつけた阿蘇出身の大和巡査さんが“ススだらけで、まるで猫のようにミャーミャー泣いていた”私を見つけて救助してくれたそうです。

征子さんは中学生の時、両親からはこの時の様子を初めて聞き、驚きました。昭和60年頃、玉名を訪れた大和さんと偶然に対面することができ、お礼を言うことができたそうです。「こんなことが二度と無いように、大浜の町にということ（戦争）があったことを伝えていかないといけない」と、有明中学校の生徒に体験談を語り、若い世代に平和への思いを伝えています。



二度にわたる大浜空襲を語り継ぐ中嶋征子さん

（５）④項 熊本県内各地への米軍側空襲記録のデータベース化「新資料の調査・集約！」

これまで九州内の空襲調査に取り組まれている「空襲・戦跡九州ネットワーク」での米軍資料集約作業を参照して、現在データベース化に取り組んでいます。一部ですが、「米陸軍航空隊第7航空団による熊本県内の空襲」を紹介します。この先は、先進事例として「静岡平和資料センター」を中心に取り組まれている「静岡空襲データベース」を基に、日本側と米軍側証言の一致化についても作業を進めていきます。

航空団	群団	戦隊	攻撃時刻	目標	機種	機数	高度 m	爆弾 種類	焼夷弾 種類	焼夷弾 トン数	焼夷弾 トン数	焼夷弾 トン数	焼夷弾 トン数	焼夷弾 トン数	備考 ¹⁵⁾ 【()内の最初 の区切りは Record Group. 次が Entry No. 最後が box No.
7	319	437	9:56	工場地域	A26	8	100			5	5			5	10:05 (018/NM6 7A/3611)
		438		都市地域	A26	8	100					7	8	8	09:56-10:10 (018/NM6 7A/3612)
		439		工場地域	A26	7	100			5	4			4	
		440		都市地域	A26	8	100			5	3			3	
7	494*	864	10:09	都市地域	B24	6	11000			15	14			14	10:09 (018/NM6 7A/3168)
7	11	26	10:10	都市地域	B24	5	11000			15	12			12	10:12
		26		都市地域	B24	5	10500			15	12			12	
		98		都市地域	B24	11	11500			15	26			26	10:11-10:12 (018/NM6 7A/3547)
		431		各種目標	B24	5	11000			15	12			12	なし
7	41	47	10:25	各種目標	B25	12	300			5	5			5	
		48		都市地域	B25	11	300			5	5			5	10:30 (018/NM6 7A/3529)
		396		工場地域	B25	12	300			5	5			5	
		820		工場地域	B25	12	200			5	5			5	
7	507		10:30	各種目標	P47	45	100			24	57			57	10:30 (018/NM6 7A/3471)
7	413	1	11:00	都市地域	P47	20	300			24	15			15	
		21		各種目標	P47	23	200			24	16			16	
		34		工場地域	P47		200			24	16			16	
7	318	19	11:30	都市地域	P47	17	100			24	17			17	11:40 (018/NM6 7A/3677)
		73		都市地域	P47		100			24	20			20	
		333		鉄道駅	P47	12	100			24	12			12	
7		420	不明	都市地域	B24	11	11500			15	26			26	
5	43	403	11:08-11:10	各種目標	B24	2	12500			21	4			4	
5	3	8	10:55-11:20	各種目標	A20	13	100			5	3			3	
		8		各種目標	A20		100			6	8			8	
		8		各種目標	A20		100			24	4			4	
		13		都市地域	A26	4	100			5	3			3	
		13		都市地域	A20	9	100			6	9			9	
		89		各種目標	A20	13	100			5	2			2	
		89		各種目標	A20		100			6	9			9	
		89		各種目標	A20		100			24	4			4	
		90		各種目標	A26	3	100			5	2			2	
		90		各種目標	A20	9	100			6	9			9	
		90		各種目標	A26		100			24	3			3	
5	8	35	11:15-11:40	都市地域	P38	16	200			24	8			8	11:15-11:25 (018/NM6 7A/5464)
		36		各種目標	P38	14	1000			24	7			7	11:30-11:40 (018/NM6 7A/5478)
		80		都市地域	P38	15	300			24	8			8	11:18-11:40 (018/NM6 7A/3705)

* 第494群団の864、866、867の3戦隊は、臨機的目標として宮崎を攻撃した。

表2
194年8月10日
第2回熊本空襲
の概要 工藤洋
三氏 提供

5 おわりに ～私の思い、事業の展開と連携等～

穏やかな「春の光」のもと、2025年4月13日昼前、大牟田市三池の「普光寺」高台にある公園にある「大牟田空襲の碑」前で「第32回平和の集い」が開催されました。1972年に結成された当会が、当地に慰霊碑建立後に毎年開催する集いでした。大牟田空襲で亡くなられた962名の方々を悼み、平和憲法に基づき非核を貫き、外交・防衛、生活確立し、国連を中心とした平和と人権尊重を願う集会です。



「大牟田空襲の碑」前での「第32回平和の集い」で挨拶する筆者
2025年4月13日 普光寺高台の公園

令和7年8月は「戦後80年」節目の年であるとともに「昭和100年」でもあります。戦争体験者は年々少なくなり、今の日本は「戦争を知らない世代」が大半を占めています。近い将来、戦争体験者はいなくなり、体験者に頼らない「継承の形」を考える時期を迎えています。

熊本県内戦争遺産の調査・研究活動と啓発活動は、両輪の活動で、その活動そのものが「未来への継承」だと思います。戦後世代である高谷の「平和継承の活動」です。戦争遺跡は、歴史の遺産であり、忘れてはならない「歴史事実の厳粛なる遺構」であり、「モニュメント」です。さらに地域が戦争で失った貴重な人命、地域の自然や文化、そして地域が戦災のあと復興し生きてきた歴史を考えるうえからも、戦争遺跡の調査研究・保存活用は重要です。戦争遺跡・遺産の学び・見学での「戦争の加害や被害の両面」「東アジア史」視野からの歴史認識の重要性があり、時代背景や地域特性に関する基礎的な学びの保証が、まずは必要です。近年、文化財活用論に圧され、全国では単に関心のハードルを下げる手法が多用されますが、誤用された昭和期の「満洲戦蹟保存運動の反省」を踏まえ、徹底した「戦争と平和の学び」の学習保証と、戦争遺産が「国民の共有財産・ヘリテージ」であるとの文化財認識を根底とすべきではないでしょうか。

「戦後80年」となる今年の7月1日「第17回熊本空襲を語り継ぐ集い」では、これら取り組み概要の報告を予定しています。①「調査・研究・総合」視点、②「平和継承」視点、③「教育普及・啓発」視点を丁寧に示しながら、県内報道各社様との連携、行政機関・他団体との連携等の共同作業ができるかの模索を進めたいと思います。是非、皆さま方もご参加ください。

2025（令和7）年4月20日脱稿



第11回熊本空襲を語り継ぐ集いでの「上村文男先生」

米陸軍航空隊 第5航空団（沖縄移駐）による熊本県内の空襲

20250401 高谷作成版

月 日	目標	群団名	機種	機数	高度	通常爆弾		焼夷弾		破砕爆弾		爆弾合計	米軍資料	日本側の資料
					㌦	種類	㌦	種類	㌦	種類	㌦			
7月31日	水俣	345群団	B25	24	100	M64	24					24		水俣市史
8月5日	熊本（各種）	418戦隊	P61	1	5000	M65	1					1		
8月6日	熊本（各種）	418戦隊	P61	1		M65	1					1		
	熊本(鉄道)	43群団	B24	2	6500	M64	4					4		
8月7日	芦北の鉄道橋	348群団	P51	17	3000	M64	4					4		芦北町史
	川尻の橋梁	345群団	B25	19	100	M65	16					16		
	松橋の橋梁	345群団	B25	2	100	M65	2					2		松橋町史・不知火町史
	松橋の道路橋	345群団	B25	7	100	M65	7					7		松橋町史・不知火町史
	八代の橋梁	35群団	P51	21	500-8000	M64	6					6		
8月8日	熊本（各種）	418戦隊	P61	3	9000	M65	3					3		
	熊本市街地	421戦隊	P61	6	7500	M65	6					6		
	緑川橋梁	58群団	P47	27	3000-5000	M65	14					14		
8月9日	熊本飛行場	418戦隊	P61	3	2000	M65	3					3		
		421戦隊	P61	3	8000	M65	3					3		
8月10日	熊本市街地	3群団	A20	9	100			M76	9			9		熊本市史
		8群団	P38	31	200-300			165 [㊦] NP	16			16		
	熊本（各種）	3群団	A20	26	100			M47A2	5			5		
			A20	0	100			165 [㊦] NP	8			8		
			A20	0	100			M76	17			17		
			A20	9	100			M76	9			9		
			A26	7	100			M47A2	5			5		
			A26	0	100			165 [㊦] NP	3			3		
		418戦隊	P61	2	6000	M65	2					2		
		43群団	B24	2	12500			50 [㊦] NP	4			4		
		8群団	P38	14	1000			165 [㊦] NP	7			7		
	8群団	P38	14	1000				165 [㊦] NP	7			7		
8月11日	佐敷の鉄道橋	8群団	P38	43	1000	M65	21	165 [㊦] NP	2			23		
8月12日	川尻?の鉄道橋	58群団	P47	7	100	M65	2					2		
	熊本飛行場	421戦隊	P61	4	10000	M64	2					2		

表3 米陸軍航空隊 第5航空団（沖縄移駐）による熊本県内の空襲一覧 20250401 版 工藤洋三氏提供

米陸軍航空隊 第7航空団（沖縄移駐）による熊本県内の空襲

20250308 高谷作成版

月 日	目標	群団名	機種	機数	高度	通常爆弾		焼夷弾		破砕爆弾		爆弾合計	米軍資料	日本側の資料
					㌦	種類	㌦	種類	㌦	種類	㌦			
7月30日	熊本飛行場	494群団	B24	2	11500					M81	5	M81_5 [㌦]		記載なし
7月31日	熊本飛行場	11群団	B24	2	8000-10000					M81	6	M81_6 [㌦]		記載なし
8月1日	熊本市街地	11群団	B24	1	13700					M81	3	M81_3 [㌦]		記載なし
	八代の狭量	318群団	P47	18	2000	M65	18					M65_18 [㌦]		記載なし
8月7日	水俣	318群団	P47	17	4500	M65	17					M65_17 [㌦]		記載なし
	水俣の化学工場	318群団	P47	33	3000-6000	M65	33					M65_33 [㌦]		水俣市史
		507群団	P47	16	3000	M65	16					M65_16 [㌦]		
8月10日	熊本(未確認目標)	413群団	P47	23	200			165 [㊦] NP	16			165 [㊦] NP_16 [㌦]		熊本市史
		B25	12	300				M47A2	5			M47A2_5 [㌦]		
		11群団	B24	5	11000			M19	12			M19_12 [㌦]		
		507群団	P47	45	100			165 [㊦] NP	57			165 [㊦] NP_57 [㌦]		
	熊本市街地	413群団	P47	20	300			165 [㊦] NP	15			165 [㊦] NP_15 [㌦]		
		318群団	P47	17	100			165 [㊦] NP	37			165 [㊦] NP_37 [㌦]		
		11群団	B24	21	10500-11500			M19	50			M19_50 [㌦]		
		41群団	B25	11	300			M47A2	5			M47A2_5 [㌦]		
		420戦隊	B24	11	11500			M19	26			M19_26 [㌦]		
		319群団	A26	8	100					7	8	120 [㊦] Fr_8 [㌦]		
			A26	8	100			M47A2	3			M47A2_3 [㌦]		
		494群団	B24	6	11000			M19	14			M19_14 [㌦]		
	熊本の工場地域	413群団	P47		200			165 [㊦] NP	16			165 [㊦] NP_16 [㌦]		
		41群団	B25	24	200-300			M47A2	10			M47A2_10 [㌦]		
		319群団	A26	15	100			M47A2	9			M47A2_9 [㌦]		
	熊本駅	315群団	P47	12	100			165 [㊦] NP	12			165 [㊦] NP_12 [㌦]		

表4 米陸軍航空隊 第7航空団（沖縄移駐）による熊本県内の空襲一覧 20250308 版 工藤洋三氏提供

私の専門は近現代の戦争遺跡・戦跡考古学の調査研究です。平和希求の市アールを結成し、戦後80年の2025年には設立から20年目の節目を迎えます。今回私の半生を通して「無言の語り部 戦争遺跡」を「平和のボタン」として継承する大切さを伝えられればと思います。

私は1954年生ま。この頃、粉ミルクにヒ素が混入した森永ヒ素ミルク中毒事件が西日本各地の乳児に健康被害をもたらしました。『あだけ毒入りミルク』を飲んで、よく助かったもんだ。今は亡き母から何度も聞かされた言葉です。幸運にも後遺症は無いものであります。私が「平和のボタン」として戦争遺跡や、教育として歴史的ケアの必要な重複障がいの子とどうにかかわる中で「命の重みと学び」を考える原点となっています。

わたしを語る

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク代表

高谷 和生

平和のボタン 未来へ

①

さて、父母から授かった「和生」という名前、苦しかった戦争が終わり、平和な時代に生まれたから名付けたのだと何度も聞かされた。ただ、私はこの「和」の由来が小さい時は恥ずかしく「昭和生まれ」の「和」であるとおぼえて言い換えていました。

市民グループでの平和活動を始め、やがて「平和」



命の大切さを見詰める

玉名町小学校玉名市での平和学習を語る高谷和生(2023年10月)

「和である」と自信を持って言えるようになった。随分と長い時間がかかってしまいました。太平洋戦争で亡くなった約310万人の一人一人に名前があります。ブーゲンビル島での戦死、熊本空襲、必ず最後の一人まで戦没の姿を明らかにしなければなりません。私たちは戦争の実相を解明し、命の大切さを見詰め、平和の大切さを後世に伝えたいのです。本連載が多岐の方々と平和を考えるきっかけとなることを願っています。

私の座右の銘は「温故知新」「人間万事塞翁が馬」。

この二つの言葉が物語る私の半生です。

今春、建築家安藤忠雄さんが熊本県に子ども図書館「くまもと森 熊本」を寄贈され、4月8日に開館しました。早速訪れ、壁一面の絵本と対面しました。とても素敵な空間でした。そこで、私が読んだ平和の絵本などを時折紹介していきます。そして読者の皆さまと共に来年の戦後80年に向けた平和継承の思いを、「平和の絵本」などに重ねられればと思います。

第1弾は戦時中の水戸野動物園(当時)で起きたインドウ・メリーの悲劇の物語「くまねメリー」です。戦争で食糧不足となり、メリーは飼育係の手でやむなく殺されます。命の大切さと戦争を考える不朽の名作。飼育員とメリーのやりとりを心打たれます。

(担当・藤本英行)

2024.6.21

熊日新聞での高谷連載・わたしを語る

「平和のボタン 未来へ」

令和6年6月21日～9月3日

・全51回

記憶の継承へ保存進めて

消失する戦争遺跡

太平洋戦争関連の旧軍施設を主とした戦争遺跡について、文化庁の近代遺跡調査に市区町村から報告があったら、遺跡のつくり約3割が、開発や劣化などのため消失した。大部分が消失し、原形をどめていないことが明らかになった。来年は戦後80年を迎える。戦争体験者が少なくなる中、遺跡を通過した記憶の継承は重要な。遺跡は大きく消失、残る遺跡は現存の把握や保存に向けた対策が望まれている。

社説

文化庁の調査は1996年に始まった。国にも調査として唯一とされ、熊本・関国(うら)から第2次世界大戦終結後の「軍事」などが対象となった。安藤が確保できず解体された例もあった。天草

自治体は独自で保存を進めている例もある。神奈川・川崎市は地域文化財顕彰制度を創設し、旧陸軍登戸研究所を選んだ。北海道、戦災の痕跡を残す遺跡もあるはずだ。戦争の記憶を伝え、平和を考える貴重な遺産として後世に残していきたい。

所在地のリストを入手。43都道府県の216市区町村にアンケートを実施して現状を聞いた。熊本県内からの報告は、熊本市の田原坂古戦場(一騎兵第6連隊兵舎跡)、一歩兵第十三連隊食室の跡と、天草市の天草海軍航空隊遺構。騎兵第6連隊兵舎跡

海軍航空隊遺構も、天草市は「天草の216市区町村にアンケートを実施して現状を聞いた。熊本県内からの報告は、熊本市の田原坂古戦場(一騎兵第6連隊兵舎跡)、一歩兵第十三連隊食室の跡と、天草市の天草海軍航空隊遺構。騎兵第6連隊兵舎跡

自治体からは、財源の確保が難しいため、保存に向けた国の財政的支援を求める声が多い。現存する戦争遺跡をより保存するのには、費用や安全性の観点からも困難だ。文化庁はいまだ調査の報告書を刊行していないが、早急に結果をまとめて分析し、保存対策や基準などの方針を示してもらいたい。

軍部で残った熊本には、文化庁に報告された4例の他にも、菊池飛行場(菊池市)や人吉海軍航空基地(錦町)など、数多くの戦争遺跡が残っている。こうした戦争遺跡の調査や、結果をまとめたリーフレットの作成、見学会などを続けている。戦争関連の資料館設立を目指す取り組みもある。このような民間の活動に、行政が協力していくことも重要ではないか。

2024.9.25

熊日新聞社説

「記憶の掲揚へ 保存進めて
消滅する戦争遺跡」

令和6年9月25日